

これからの 幼児教育

2025 Autumn

秋

特集 1

絵本で深まる 子どもの育ち

解説 学習院大学 教授 秋田喜代美

園の事例 林間のぞみ幼稚園（神奈川県・私営）

絵本Q&A 絵本専門士 鈴木直美（杉之子幼稚園園長）

特集 2

幼児期の 思考力をとらえる

解説 國學院大學 教授 吉永安里

参考資料 19の思考スキル

園の事例 ベネッセ 新横浜保育園（神奈川県・私営）

今号の写真 [表紙 / 裏表紙 / 上]
◎林間のぞみ幼稚園

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。
今号は、「絵本」に関する特集①と、「思考力」に関する
特集②で構成しています。

特集①では、保育現場での絵本の活用が、先生方それぞれに委ねられている現状を踏まえ、専門的な視点と実践例から、その意義と可能性を掘り下げました。

特集②では、思考力を19の思考スキルとして示し、日々の保育の中で子どもたちの思考の芽生えをどのように捉え、育んでいくかについて考えています。「3つの柱」「5領域」を踏まえて「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」をめざす際に、子どもの姿をより深く見取るためのヒントとしてご活用ください。

本誌が、先生方のご実践において、新たな視点を得る一助となれば幸いです。

「これからの幼児教育」編集部

STAFF

編集発行人／野澤雄樹 発行所／株式会社ベネッセコーポレーション
印刷製本／TOPPAN 株式会社 監修／北野幸子（神戸大学大学院教授）
企画・制作／ベネッセ教育総合研究所
編集協力／有限会社ヘンダコ、丹羽三千代、菊池健（mananico）、神田有希子
執筆協力／二宮良太 表紙・特集扉デザイン協力／へんな優
撮影協力／菊池健（mananico）
表紙内の紙芝居『まんまるまんま たんたかたん』荒木文子脚本／久住卓也絵（童心社）

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

ただし、営利目的ではない研修等でご使用になる場合には、出典を明記していただければ許諾のご連絡は不要です。

©Benesse Corporation 2025

CONTENTS

1 特集①

絵本で深まる子どもの育ち

2 解説

学習院大学 教授 秋田喜代美

6 園の取り組み事例

林間のぞみ幼稚園（神奈川県・私営）

10 絵本Q & A

絵本専門士 鈴木直美（杉之子幼稚園園長）

14 特集②

幼児期の思考力をとらえる

14 解説

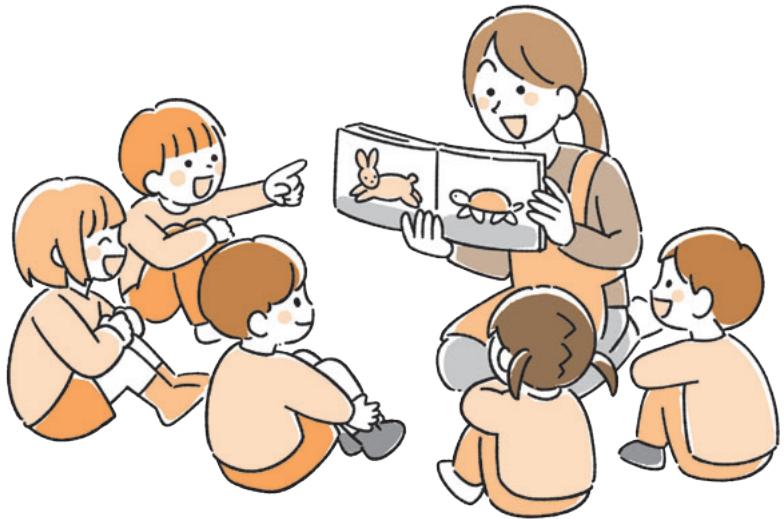
国學院大學 教授 吉永安里

18 参考資料

19の思考スキル

20 園の取り組み事例

ベネッセ 新横浜保育園（神奈川県・私営）



特集 ①

絵本で深まる 子どもの育ち

絵本そのものを始めとして、読み聞かせ、図書館利用といった絵本に触れる活動は、子どもの育ちを支え、豊かなものになります。その一方で、選書、環境構成などの具体的な取り組み方は、各園に委ねられている場合が多いのではないかでしょうか。

本特集では識者の解説や事例などを通じて、絵本が育む将来的な力をご紹介しながら、各園がどのように絵本を用いた活動を深めていけばよいかについて、考えていきます。



解説

絵本と読み聞かせの意義を学び、小・中学生までつながる基盤となる力を育む

絵本の読み聞かせは、子どもの想像の世界を豊かにしながら言葉の力を育てる大切な活動として、多くの園で実践されています。しかし、そうした活動の意義について、じっくり整理してみたことはあるでしょうか。絵本にはどのような価値があり、その読み聞かせがなぜ子どもにとって大切で、保育をより豊かにするためにどのように生かしていくべきなのか。発達心理学などを専門とし、絵本や読書に関する研究や発信に取り組んできた秋田喜代美先生に、お話をうかがいました。



学習院大学文学部 教授
東京大学 名誉教授
秋田喜代美先生 (あきた・きよみ)

東京大学大学院教育学研究科教授、研究科長などを経て、2021年から現職。専門は学校教育学、発達心理学、教育心理学。こども家庭庁こども家庭審議会会長などを歴任。著書に『絵本で子育て』(共著、岩崎書店)、『保育のみらい』『保育の心もち』(いずれも、ひかりのくに)など多数。

幼児期の読み聞かせが、子どもの育ちの基盤になる

絵本を読み聞かせるひとときが 子どもの内面や言葉の力を育てる

園における絵本の読み聞かせは、子どもが本に触れる経験を保障しながら、認知・非認知両面での豊かな育ちを支える大切な時間です。園で読み聞かせを行えば、子どもたちはその世界に引き込まれ、みんなで驚いたり笑ったりする中でクラスに自然な一体感が生まれ、情緒的なつながりが強まっていきます。心が落ち着くひとときとなる読み聞かせを毎日繰り返すことで、「今日はどんなお話かな?」と楽しみに待つ気持ちも子どもに育っていきます。

絵本を通じて、言葉の世界が広がることも重要な点です。絵本には多様で豊かな表現が含まれており、文章もやや長めで整っています。印象的な言葉を声に出して楽しんだり、文脈から意味を推測したりすることで、子どもは語彙の幅を広げていきます。言葉への感受性も、そこから育まれます。

絵本を上手に活用すると、日々の保育をもっと豊

かにすることができます。例えば外遊びの前にその遊びに関する絵本を読むことで、自然への興味・関心が高まり、遊びへの意欲も高まっていくでしょう。また、帰りの会でその日の活動とつながる絵本を読めば、理解を深める振り返りの場にもなります。

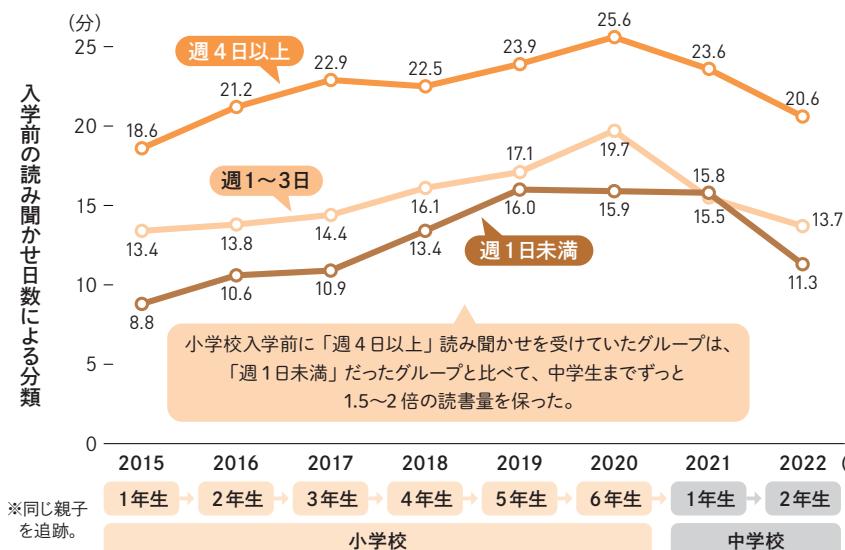
物語をきっかけとして、子どもたちの主体的な遊びが広がることもあります。例えば、『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネット作、福音館書店)を読み、「こんな遊びをしよう」と、想像を膨らませる姿が見られるかもしれません。

絵本との出会いが長期的に 重要となる資質・能力を育む

長期的な視点で見ても、絵本の読み聞かせは子どもの発達に大きな影響をもたらすことが、国内外の継続的な研究から明らかになっています。

家庭では、乳児期には読み聞かせの機会が比較的多くもたれていますが、幼児期には家庭による差が

図1 読書時間の個人変化(入学前の読み聞かせ日数別、小1→中2で同じ親子を追跡)【2015-2022年データ】



大きくなるという実態があります。こうした違いは、小学生以降の読書習慣に大きく影響するという調査結果が報告されています。

小・中学生時期に同一の親子を継続して調査した結果を読書行動に着目してまとめた資料「子どもの読書行動の実態」^{*1}によると、小学校入学前にほとんど家庭で読み聞かせを受けなかった子どもは、学年が上がっても読書時間は短いままで、不読につながりやすい傾向があります。一方で、家庭で週4日以上の読み聞かせを受けていた子どもは、学年が上

がっても一定の読書時間を保っています(図1)。

幼児期から中学生まで同じ母親を継続して調査した「幼児期から中学3年生の家庭教育調査」^{*2}には、幼児期の読み聞かせが小学生での「ひとり読み」や「読書体験共有」につながり、中学生での語彙力を支えていることが示されています(P.4 図2)。つまり、幼児期の読み聞かせを通じて1人で読書ができるようになることで、語彙力や論理性、思考力といった、将来にわたって求められる資質・能力の基盤となる重要な力が育まれるのです。

「読む」だけで終わらせず、絵本の力を保育に「生かす」

絵本を通した豊かな会話で 子どもの表現力を育む

読み聞かせは、10～15分程度でも習慣化できれば十分に効果があります。家庭での読み聞かせでは、忙しい中でも「短くても続ける」ことを意識するよう、保護者に伝えていただきたいと思います。

家庭での読み聞かせには、子どもが気に入った絵本を繰り返し読めるというよさがあります。園が保護者に「○○ちゃんはこの絵本が好きですよ」と伝えることで、家庭での読み聞かせが豊かになるとともに、園から家庭へと子どもの経験がつながります。

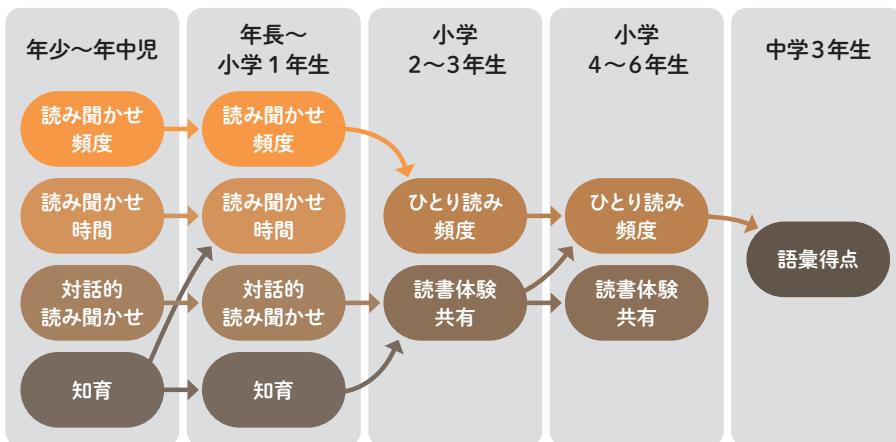
個別に伝えるのが難しい場合は、その日に読み聞かせた絵本を送迎時に目に入りやすい場所に置いておくことでも、保護者と情報を共有できると思います。

反対に、家庭で読んでいる絵本を聞いてクラスで紹介すれば、それぞれの子どもの思いをみんなで共有できます。そのように、家庭と園の両方で絵本に触れる機会があることで、子どもの言葉の力や思考力はより豊かに育っていくのです。

とはいえ、現実には、絵本に親しむ時間をなかなか取れない家庭もあります。だからこそ、園での読み聞かせ体験がより重要になっていきます。

園での読み聞かせには、家庭とは異なるよさがあ

図2 読み聞かせとひとり読み・読書体験との関連について



幼児期から小学1年生までの家庭での読み聞かせや対話的なかかわりが、小学2年生以降のひとり読みや読書体験にどのように関連するか、またそれらが中学3年生の「語彙得点」にどのように影響するかについて検証した。家庭での幼児期の読み聞かせや対話的なかかわりが、小学生でのひとり読みや親子での読書体験の共有につながり、中学生での語彙力を支えていることが示唆されている。

*ベネッセ教育総合研究所「幼児期から中学3年生の家庭教育調査」より。

*2 調査の詳細は、下記でご検索ください。

ベネッセ 幼児期から中学3年生の家庭教育調査



ります。その1つが、子ども自身の興味・関心だけではない多様なジャンルの絵本に触れることで、絵本が表現するさまざまな世界を体感できるということです。さらに、保育者やボランティアの保護者など多くの読み手がいるので、同じ絵本からいくつもの発見ができるかもしれません。

保育者と子どもや、子ども同士に対話が生まれることも、園での読み聞かせの大きな魅力です。子どもたちは美しい言葉や面白い表現に出合うと、それをだれかに伝えたりします。友だちや保育者など、伝えたい相手がそばにいるのは、園だからこそです。そうした日々のやり取りが積み重なって、表現力やコミュニケーション能力が育っていきます。

対話は、言葉のやり取りだけに限りません。保育者のまなざしや表情、ちょっとしたしぐさや間の取り方なども、子どもとの大切な対話の一部です。子どもたちの様子を見て、ざわざわしているときには待ってから読み始め、子どもの反応を確かめながらページをめくるといった配慮も、子どもとの対話といえるでしょう。「最後まで静かに聞く」といった約束を決めている園もあると思いますが、それ以上に大切なのは、子どもたちの様子を感じ取りながら読むことです。目安として、「子どもの表情を見るのが7割、読むのが3割」ということを意識しましょう。子どもの表情や息遣いに目を配りながら読み進めることが、より豊かな対話を生み出します。

子どもが集中しやすい環境を整えることも、対話を維持する上では欠かせません。保育者が部屋の奥

に座り、子どもの視界に余計なものが入らないようになるなどの工夫が、子どもの集中力を高めます。

絵本をテーマとした園内研修で 絵本から生まれた事例を共有する

保育者が園生活や行事に関連した絵本を読み聞かせることで、子どもたちは日々の体験とつながる物語に出会い、新たな世界に触れることができます。絵本の部屋やコーナーを設けている園では、子どもが落ち着いた環境の中で自分の読んでみたい絵本を探すこともできます。そうした時間は、子どもの興味や好奇心を広げる上でとても大切です。ただ、多くの保育者がそうした活動の重要性を感じる一方で、よい本のそろえ方がわからなかったり、業務に追われて「時間になったから読み聞かせを始めよう」とルーチン化してしまったりする実態もあるようです。また、絵本に関する公的な研修はほとんど行われておらず、園や保育者に任せきりになっています。

そこで、絵本に関する取り組みをより充実させるために、絵本をテーマとした園内研修を行ってみてはいかがでしょうか。保育者同士がよい絵本を紹介し合って見識を広げ、絵本をきっかけに遊びが豊かに展開した事例の共有ができれば理想的です。

ある園では、泥遊びに夢中になっている子どもたちの近くに、「土」をテーマにした絵本をさりげなく置いておきました。すると、絵本を読んだ子どもたちから「土ってずっと昔からあるんだね」といつ



た声が上がり、好奇心が広がって、顕微鏡で土を観察する活動へとつながりました。こうした事例を共有すれば、絵本の価値や活用方法が園全体に広がります。もし研修の時間を取りするのが難しければ、他のクラスの先生の目に留まりやすいところに絵本を置いて互いに確認できるようにするだけでも、会話が生まれ、学びに向けての第一歩になると思います。

家庭や地域、専門家と連携し いつも絵本が近くにある環境を

予算の関係で絵本の購入が難しいケースもあります。その場合は、卒園生の保護者などに、家庭で読まれなくなった絵本を寄贈してもらうのも1つの方法です。さらに、公立図書館や小学校の図書室を訪問するといった地域との連携により、多くの本に触れる機会をつくることもできると思います。こうした工夫を重ねることで、予算や環境面での難しさもある程度はカバーできるのではないかでしょうか。

特別な配慮を必要とする子どもが手に取りやすい絵本の提供方法に、課題を感じている園もあるかもしれません。その際には、「りんごの棚」(右上参照)という取り組みが参考になると思います。「りんごの棚」は各地の公立図書館に増えつつある取り組みなので、調べて近隣にあれば、まずは保育者が見学に行ってみるとよいでしょう。また、昨今はハンディキャップに対応したデジタル絵本も充実しているため、取り入れてみることも一案です。ただ、デジタル絵本の自動読み上げ機能などを使用する際には、子ども任せにせず、対話を通じた活用を意識していただきたいと思います。

近年は、地域に「絵本専門士」として活動する人

保育者の みなさんへの メッセージ

子どもたちが絵本と出合っているときの、あの真剣でキラキラと輝くまなざしは、きっとどの保育者にとっても魅力的に映ることでしょう。そんな時間をすべての子どもに保障したいと思いますし、保育者のみなさんも子どもと一緒に、ゆったりとした気持ちで絵本を楽しんでいただけたらと願っています。そして、そうした絵本の世界の魅力を、ぜひ保護者の方々にも伝えていってください。

「りんごの棚」とは？

読書に困難のある子どもを含む、すべての子どもたちに“読書の喜び”を届けるために、1993年に、スウェーデンの公立図書館で始まった取り組みです。棚には、点字つき絵本や布の絵本、大きな文字の本、LLブック（やさしく読める本）など、障害の有無によらず、だれもが楽しめる本が集められています。

大きな目についた赤いりんごのロゴマークがシンボルで、最近は公立図書館や学校図書館にも設置が進み、日本では、子どもだけでなく大人にも開かれた読書の場として広がっています。



写真提供／東京都豊島区立中央図書館

材も増えてきました。こうした専門家と連携し、園内研修に招いたり、読み聞かせの実演をお願いしたりすれば、保育者が絵本の読み方や選び方、保育とのつなげ方などを改めて見直すよい機会になるでしょう。

絵本に親しむ経験は、子どもの可能性を広げることにつながっていきます。家庭や地域と連携しながら日常的に絵本に触れる時間を充実させ、すべての子どもが「絵本をもっと読みたい」と思えるような体験を積み重ねていくことを願っています。

園の取り組み事例

林間のぞみ幼稚園（神奈川県・私営）

絵本と出合う環境の中で 保育者との絆を深め、 子どもの内面の成長を支える

取り組みの
ポイント

- 絵本や紙芝居の蔵書を少しずつ増やし、地域の公立図書館の団体貸出制度も利用しながら、日常的にお話を触れられる環境を整備。
- 園での絵本の貸し出しや、保護者を含めた多様な人による読み聞かせを実施し、家庭とともに子どもがお話を親しむさまざまな機会を提供。

お話を出合う環境を整えて、豊かな時間を生み出す

子どもと保育者の絆づくりとして
絵本を位置づける

神奈川県相模原市にある林間のぞみ幼稚園では、子どもの興味や、「やりたい」という思いから始まる遊びや活動を軸に主体性の発揮を促すことで、「子どもが自ら育つ力」を伸ばす保育を実践しています。そうした理念のもと、保育者は子どもに丁寧に寄り添い、一人ひとりをリスペクトして認め、自尊感情を高めながら、同時に人は頼れるものだという信頼感を育みます。初めに子どもと保育者との間に強い絆をつくることで、子どもは友だちとも関係を築けるようになり、3年をかけて集団ができ上がっていきと考えています。園長の藤本吉伸先生は、次のように思いを語ります。

「私たちがめざすのは、“豆腐”のように枠にはめられ、きれいに形が整えられた集団ではなく、“納豆”的に一粒一粒が際だちながら、仲間としてつながり合える集団です。その根幹を成す子どもと保育者との絆は、子どもが保育者の温もりや人間味を感じることで深まっていきます。そこにお話が大きな



園長
ふじもとよしのぶ
藤本吉伸 先生



副園長
はらだいち
原大智 先生



事務（絵本担当）
あらいてみお
荒井弥生 先生

お話ししてくださいった先生方

役割を果たすと考えているので、私たちは絵本や紙芝居、素話を大切にしているのです」

同園では、約50年前から「のぞみ文庫」という絵本の部屋を設け、絵本を身近な存在として扱ってきました。「のぞみ文庫」には約3,000冊の蔵書があり、さらに職員室に約1,000冊がストックされて、各クラスにも季節や活動に合う絵本、人気の絵本などが置かれています。年に1回は棚卸しをして、あまり読まれなくなった絵本などを整理しながら、新



写真1 絵本や図鑑、紙芝居など約3,000冊をそろえた「のぞみ文庫」は、子どもたちが自分のペースで絵本と出会い、興味や関心を深めたり、新しい世界に触れたりできる環境が整えられています。



写真2 「おはなしタイム」は、毎日、子どもたちが心待ちにするひととき。絵本を通して、保育者と子どもが心を通わせる大切な時間になっています。

規の絵本を隨時追加。絵本の費用は、年度の最初に予算を確保し、保育者からのリクエストも踏まえて新刊本や中古本を購入しています。選書にあたっては、「子どもが楽しめそう」「大人が読んでも面白い」「心を動かされるストーリーがある」といった視点を重視しています。

また、地域の公立図書館の団体貸出制度も利用。年に2回、紙芝居と合わせてそれぞれ200冊の絵本を借りることで、子どもたちに幅広い絵本と出会う機会を提供しています。絵本の管理を担当する荒井^{みよ}弥生先生は、図書館を利用するよさを次のように説明します。

「園の予算には限りがある中で、図書館の利用で絵本の数や種類を充実させ、子どもの興味・関心に幅広く応えています。さらに、保育者が新しい絵本を知るきっかけになり、園としてどんな絵本を購入

すべきかを考える際のヒントにもなっています」

図書館での選書や、園での絵本の棚卸しなどは、司書的な業務に携わる「文庫委員」（保護者ボランティア）を編成し、その方々の協力を得て、保育者の負担軽減を図っています。特に選書は、園の要望を伝えつつも基本的に文庫委員に任せており、新たな視点が加わることで多様な絵本と出合える環境づくりにつながっているといいます。

毎週の絵本の貸し出しで 家庭でも絵本と触れ合う時間を楽しむ

同園では、日常の遊びや生活の中にごく自然に絵本を取り入れています。毎日、朝や帰りの会には「おはなしタイム」を設け、担任の保育者が子どもたちに絵本や紙芝居を読んでいます。何を読むか、いつ読むか、何回読むかは保育者の自由。絵本に限らず同園では、「子どもたちをよく理解している担任の保育者が、それがより子どもたちのものになるように保育をしてほしい」という藤本園長の方針に基づき、クラスごとに個性豊かな保育が展開されています。

保育者は絵本を読むとき、子ども一人ひとりに思いを届けるように語りかけ、目を合わせ、その反応に寄り添います。子どもがその絵本の特性をより楽しめるように、環境と場や距離にも配慮します。また、身を寄せたり、膝に乗せたりしながら少人数の子どもに読む活動も大切にしています。そうしたかわりは、物語を楽しみながら、子どもの心に保育者に読んでもらったという温もりの感触を残す、大切なひとときだと考えています。

子どもたちが絵本と触れ合う機会の1つが、「ぶんこのじかん」と呼ばれる、のぞみ文庫での絵本・紙芝居の貸し出しです。週1回、クラスごとに10分間、1人あたり2冊まで借りられるしくみで、貸し出しカードの記入などは文庫委員にお願いしています。お気に入りのものを毎回借りる子もいれば、絵の雰囲気にひかれて手に取る子など、子どもたちの選び方はさまざま。自分の「好き」を見つける時間にもなっています。

「中には借りる絵本が決まらない子もいて、保育

者や文庫委員が時間を超過して『この絵本はどう?』と、お勧めの絵本を紹介することもあります。その子その子が今どんなことに興味があるのか、わかる機会にもなっています」(荒井先生)

借りたものは家に持ち帰れるよう、保護者には大型絵本や紙芝居が入るサイズの布袋を用意してもらっています。子どもが自分で選んだものを大好きな人に読んでもらうことで、大事にされ、愛されていることが伝わっていくと考えています。

絵本の世界を楽しみながら さまざまな人とのつながりを育んでいく

年中と年少クラス、未就園児を中心に、月3回の金曜日に「えほんのむし」という取り組みも行っています。以前はのぞみ文庫を開けておき、自由にやって来る子どもに文庫委員が絵本を読んでいましたが、今年度からは、卒園生の子どもをもつ木版絵本作家のもりといづみさんがこの活動を担っています。週ごとに年齢を決めて各クラスを訪れ、もりと

さんと荒井先生が3冊ほどの絵本や紙芝居を読んでいます。活動終了後には約30分間、もりさんは「アトリエ」と呼ばれる工作物や水槽、絵本などが置かれた部屋に移動し、もっと絵本を読んでほしい子や紙芝居を自分で操作したい子、年長クラスの子などを受け入れています。

「子どもが好きな絵本だけでなく、子どもに伝えたい絵本を読む機会にするため、スタイルを変えました。移動紙芝居屋さんのような雰囲気で、『絵本の時間だよ』と声をかけると、子どもたちはうれしそうに集まってきます。特にルールは決めておらず、年齢やクラスによって雰囲気も違いますが、読み始めるとどの子も自然と集中して耳を傾けてくれます。普段読んでいる保育者とは読み方や選書が異なることも、楽しさにつながっているようです」(荒井先生)

このほかにも、年に3、4回、藤本園長が学年ごとに素話中心の「おはなし会」を開くなど、さまざまな人の語りを通して、お話を触れる機会をつくっています。

絵本をきっかけとして、豊かな遊びや活動が生まれる

絵本から芽生えた興味を 日々の保育につなげていく

絵本を通じて子どもの内面が育まれることで、日々の遊びや活動にも広がりが生まれています。例えば、絵本を見て文字に興味をもち、覚えようとする子もいます。その際、園では、自分で絵本を読みたい、あるいはだれかに手紙を書きたいなど、子どもが必要性を感じる気持ちに基づく行動であることを重視しながら、サポートをしています。

また、絵本からインスピレーションを得て「ごっこ遊び」や物作りが始まったり、劇活動のテーマを発想したりすることも少なくありません。副園長の原大智先生は、子どもたちが絵本の世界に触れる中で、想像する力や表現する力が無理なく育まれると話します。

「絵本は、子どもが出会うもっとも身近なアート

の1つ。日常とは異なる視点を投げかけてくれ、その世界に誘います。子どもたちはスッとその世界に入って心を躍らせます」

子どもたちの主体性を尊重した保育を展開する中で、絵本から生まれた興味・関心を掘り下げるケースも多いといいます。例えば、子どもたちが『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネット作、福音館書店)を読み、その世界を作つてみたいという思いが生まれ、創作活動へと発展しました。その動きはやがて学年全体に広がり、大きな活動へと育つといったといいます。

「一人ひとりのやりたいことが異なる場合もありますが、どうしたらみんなが納得して楽しめるか、おのずと子どもたちで話し合いを始めます。正解のないことに対して、いろいろな人の気持ちを受け止めながら話し合っています。ときには、いくつかのアイデアをくっつけて、新たなものを創造すること

ぶんこのじかん

毎週、各クラスの子どもたちが好きな絵本を2冊ずつ借りる時間。貸し出し手続きなどは文庫委員が行います。絵本を受け取った子どもが、その場に座って夢中で読み始める姿も見られます。

**えほんのむし**

保育者以外の大人を通して絵本の世界に触れる、特別な時間。自由に座った子どもたちは、次第に絵本や紙芝居の世界に引き込まれていきます。



もあります」（原先生）

年長クラスのお泊まり会では、事前にみんなで『きょうりゅうえんち』（やましたこうへい作、ポプラ社）を読みました。それをモチーフに、恐竜だらけの遊園地から招待状が届いたという設定でお泊まり会を開始。子どもたちはワクワクと期待感をもって参加し、仲間と協力して大きな恐竜の絵を描いたり、物語に登場する場面に見立てた遊びを楽しんだりしました。お泊まり会が終わった後も、「恐竜遊園地の園長先生」との手紙のやり取りを続け、物語の世界を現実の遊びの中で広げていくような活動が展開されました。

絵本で心を通わせる経験が 懐かしく温かな記憶となる

同園では、保育者が長く働き続けることで保育の連続性が保たれ、理想の保育の実現につながるとい

**林間のぞみ
幼稚園**

「みんなが愛情を注ぎ育てる」を保育理念に掲げる。子どもがもつ「100の自ら育つ力」を伸ばすことをめざし、少人数のクラス編成により、人・もの・ことのかかわりを広げていく保育を実践している。

う考えから、子育てなどで現場からいったん離れた保育者を積極的に迎え入れています。そのため、保育歴30～40年のベテランの保育者が多く在籍しています。こうしたベテランの保育者による味のある絵本やお話の時間は、子どもたちにとってじっくり楽しめるひとときになるのと同時に、若い保育者にとっても、語りかけの工夫や雰囲気づくりなど、多くの学びを得る機会になっています。

そして、保育後の時間を使って、保育者はほかの保育者の実践についての気づきを話し合い、自身の実践に生かすようにしています。その積み重ねが、子どもたちの豊かな育ちにつながっています。

「いつも自分が受け入れられ、安心して過ごせる環境というのは、たとえるなら、毎日おいしい湧き水を口にしているようなものだと思います。仲間とともに過ごした温もりや楽しかった感触が、地下水のように少しづつ心の奥底にたまっていく。卒園後も、ふとしたときに思い出されるような懐かしくて温かな記憶を、子どもたち一人ひとりが心の奥に宿してほしいと願っています。このような感覚を育んでいく取り組みの1つとして、これからも絵本やお話の時間を大切にしたいと考えています」（藤本園長）

○園長：藤本吉伸先生
○所在地：神奈川県相模原市南区東林間6-5-2
○園児数：125人

絵本Q & A

読み聞かせのしかたは？

絵本を使った実践とは？

おすすめの絵本は？

先生方の疑問に「絵本専門士」が答えます！

「読み聞かせで大切にしたいことは？」「さまざまな子どもへの読み聞かせのしかたとは？」——読み聞かせをするときの疑問に、絵本専門士であり、長年にわたって保育者・園長として実践を続けてきた杉之子幼稚園の鈴木直美先生がお答えします。日々の読み聞かせをより豊かな時間にするためのヒントが、たくさん詰まっています。

絵本専門士／
杉之子幼稚園
園長

鈴木直美

(すずき・なおみ)

学校法人石川学園

杉之子幼稚園(神奈川県・私営)

奈川県・私営)園長。複数の園で保育者を務めた後、園長として11年の経験をもつ。2015年には絵本専門士の第1期生として養成講座を修了。絵本に関する深い知見を生かしながら、絵本を通して子どもの豊かな心を育む保育を実践。

**絵本専門士とは**

絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家。国立青少年教育振興機構において実施される絵本専門士養成講座を修了し、絵本専門士委員会に認定されると、絵本専門士の称号を取得できる。2015年に第1期生が誕生し、現在は全国で約700人が活動中。養成講座は30コマの授業の中で、絵本専門士になるために必要な「知識を深める」「技能を高める」「感性を磨く」の3つの領域を、半年間にわたってプロフェッショナルな講師陣に学ぶ。絵本専門士となってからは、幼稚園、学校、図書館、医療機関などのさまざまな現場で、読み聞かせ・お話会・ワークショップなどの絵本を使って行う取り組みや、指導・助言、人的・物的コーディネートなどに幅広く活躍している。

* 絵本専門士の詳細は、下記でご検索ください。

絵本専門士 国立青少年教育振興機構 で検索

Q

読み聞かせをするときに大切にしたいことは？

A

絵本の内容に応じて、読み方や声かけを変えることが大切です。

子どもたちは絵本の読み手の声を通して人の温もりを感じ取り、絵本の世界に引き込まれていきます。だからこそ、読むときは早口にならず、テンポのよさを保つようにして、ゆっくり丁寧に読むことが大切です。ページをめくるスピードや間の取り方も、「ゆっくり」を意識しながら読み進めます。

ストーリー性の高い絵本を読み終えた後は、余韻を大切にしながら子どもの様子に目を配りましょう。子どもが空想世界に深く入り込んでいるなら、「この登場人物をどう思った？」などと感想を引き出そうとせず、そっと終えるとよいと思います。逆に共有したいことがあって話しかけてくる子どもには、じっくりと向き合いましょう。

防災や交通ルールなどを扱った絵本であれば、読み終えた後に「これは、こうだったよね」と、

みんなで確認する形が考えられます。あるいは、植物図鑑のような図鑑類であれば、「これは園で育てているトマトと同じだね」と、現実世界と結びつける問いかけをしながら読むと、子どもの興味を引きつけることができます。

本の種類や目的、子どもの状況に応じて、どのように読み、どうかかわるかを柔軟に変えていくことが大切です。

Q

読み聞かせは何歳くらいから始めるとよい？

A

生後6か月くらいから、絵本を見て反応できるようになっていきます。

子どもは、「絵を見る」「声を聞く」「文字を見る」の順で理解できるようになっていきます。個人差はありますが、生後6か月くらいで絵本への指さしができ、10か月くらいで読み手の声を聞きながら絵本を楽しめるようになっていきます。子どもの反応を大切にしながら、興味を示すものから読み聞かせ



を始めてみましょう。

また、多くの絵本は、開いたときに、各対象年齢の子どもの肩幅くらいになることを配慮した大きさで作られています。子どもが幼い頃は、読み手の膝の上に乗せ、一人ひとりに向けて読み聞かせをするといいでしよう。

Q 何度も同じ絵本を読んでもらった がる子どもにはどう対応すべき？

A 何度も一緒に、子どもの新しい発見を楽しみましょう。

大人はどうちらかというと、俯瞰的な視点で絵本全体をとらえようとします。“鳥の目”で、絵本を読んでいるのですね。対して子どもは、“虫の目”的にじっくりと絵の細部を見つめます。登場人物の表情、しぐさ、建物などの色や形、風景や季節の移り変わり、隠れている虫や動物など、何度も読み返しながら発見していきます。

子どもが同じ絵本を繰り返し「読んでほしい」と言うのは、そうした新しい発見が尽きないからです。「今日は何を見つけた？」などと問い合わせながら、子どもが満足するまで、ぜひ何度も一緒に読んであげてください。

Q 配慮が必要な子どもへの読み聞かせで意識するとよいことは？

A その子の安心できる場所とペースを大切にしながら読み聞かせます。

配慮が必要な子どもは、全体での読み聞かせが難

保育者の みなさんへの メッセージ

子どもだけでなく先生にとっても、絵本は心を豊かにできる存在です。もし、絵本についてもっと学びたいと思ったら、絵本専門士養成講座への参加も検討してみてください。受講することで視野が広がり、新たな気づきや人との出会いがきっとあると思います。

しい場面もあります。そうしたときは、絵本が見えやすい位置や保育者のそばに座ることで、安心して一緒に参加できることがあります。

集団が苦手な子どもには、個別に読み聞かせをする機会を設けて、一緒に絵本選び、その子のペースに合わせてページをめくっていきましょう。選ぶ絵本も、保育者とやり取りができる、リズムや繰り返しがある、擬音語が楽しい、色彩がはっきりしているなど、その子の特性や興味に合わせた多様なテーマを取り入れるとよいと思います。

Q 読み聞かせが得意でない保育者はどうしたらよい？

A 上手に読もうとせず、自分自身が楽しむことが一番です。

読み聞かせに苦手意識のある保育者もいると思います。声の出し方や話し方のくせ（早口であることや特定の語の発音が苦手なことなど）に悩む人も多いようです。

ただ、読み聞かせは上手に読むことが目的ではありません。大切なのは、保育者自身が絵本の世界に入り込み、楽しみながら読むことです。子どもたちは保育者の表情や声の調子を敏感に感じ取り、自分自身も共鳴します。保育者が恥ずかしいとか嫌だと思っていたら子どももそう思うし、ストーリー展開にワクワクしていたらそれが伝わるのです。ほかの遊びでも、保育者が面白がっていれば、子どもも楽しい気持ちになりますよね。

絵本の読み方には正解はありません。保育者一人ひとりの個性が、そのまま魅力になるのです。

絵本の力で保育をもっと豊かに!

神奈川県杉之子幼稚園の実践

杉之子幼稚園の鈴木園長は、絵本専門士としての知見を生かし、約10年前から子どもたちが日常的に絵本に親しめる環境づくりに取り組んできました。かねてより念願だった図書室「ともだちや」を開設したほか、絵本に関する情報発信などにも力を入れ、子どもはもちろん、保護者や保育者も日常的に絵本に触れられるようにして、園全体の保育が豊かになることをめざしています。

○図書室「ともだちや」の整備

空き部屋となった保育室を改装し、図書室「ともだちや」を設置しました。木材をあしらった温かみのある室内には、約3,000冊の絵本と約400冊の紙芝居がそろっています。さらに毎年、200～250冊を新たに購入しています。

蔵書は、「どうぶつ」「たべもの」「のりもの」「おばけ」「きょうりゅう」などジャンルごとに配置し、一部は人気作家別にも配置。子どもが自分の興味に合わせて選びやすい工夫をしています。

毎週、30分間の貸し出し時間を設け、子どもたちは好きな絵本を2冊まで自分で選び、家に持ち帰ることができます。また、保育中にもクラス全員で訪れて、自由に絵本を楽しんだり、保育者が読み聞かせを行ったりなど、日常的に絵本に親しむ場として活用しています。



○「すぎバス」絵本コーナー

バスの形を模した、天井が低く狭いスペースで、子どもが1人で静かに過ごしたいときにも利用できる場所です。中に入ると柔らかな間接照明がともり、落ち着いた雰囲気の中で、子どもは安心感を取り戻すことができます。

このスペースには絵本も置かれており、子どもは少しの間、集団から離れた1人の空間で、本の世界に浸ることができます。



○園長だより「すぎっこ」での絵本紹介

毎月発行している園長だより「すぎっこ」では、月に1、2冊の絵本を紹介しています。あらすじに加えて、なぜこの絵本を子どもに読んでほしいのかといった保育者としての思いも添えています。

紹介する絵本のジャンルは、季節感を意識したものや、そのときどきの子どもの気持ちに寄り添う内容のものなどさまざまです。例えば、卒園を控えた時期には、年長児に向けてエールを送る絵本を取り上げることもあります。

「すぎっこ」は、保護者にとっては新たな絵本と出合う場になっており、家庭で絵本に親しむ時間も増えているようです。今後は、こうした絵本紹介を園のホームページでも発信し、園と家庭をつなぐきっかけの1つにしたいと考えています。

○ビブリオトーク

保育者が夏休みに読んだ絵本や書籍を持ち寄り、おすすめの1冊を紹介し合う「ビブリオトーク」を実施しています。紹介する本のジャンルは自由ですが、保育者は子どもに読ませたい絵本や、自身の考え方へ影響を与えた1冊などを紹介しています。

鈴木先生の おすすめ の絵本

『ことばのずかん こうえん いこう』

(植垣歩子 作、福音館書店)



子どもが家を出発し、公園に向かうまでの道のりで合うさまざまな「もの」に、名前が添えられている絵本です。普段は見過ごしてしまいがちなものに目を向けることで、「こんなものもあったんだ」と発見する楽しさが味わえます。この本を読んでから外に出ると、いつも通る道にもたくさんのものがあることに気づけるでしょう。世の中には多様なものが存在していることを感じるとともに、語彙を広げるきっかけにもなる1冊です。年少児におすすめです。



『ねこのピート だいすきなしろいくつ』

(エリック・リトワイン 作／ジェームス・ディーン 絵／
大友剛 訳／長谷川義史 文字画、ひさかたチャイルド)

明るい色調が子どもたちの目を引き、期待感を高めます。ストーリーは子どもたちの身近な経験とつながっており、「次はこうなるかも」と予測しやすく、自然に物語の世界に引き込まれていきます。

作中には歌が盛り込まれているなど、子どもたちが楽しく参加できる構成になっています。シリーズ展開がされており、年少児から年長児まで、幅広い年齢で楽しむことができます。



『100かいだてのいえ』シリーズ

(いわいとしお 作、偕成社)



縦長で迫力のある大型絵本です。ページをめくるたびに、1階から100階までさまざまな生きものの暮らしが展開され、子どもたちは「この階ではこんなことをしている！」と、繰り返し読むたびに、驚きや発見を楽しむことができます。数字に興味をもち始めた子どもにもぴったりで、自然に数の世界に親しめます。

空、海、地下、沼など、多彩な舞台でのシリーズが展開されており、違った世界を楽しめる魅力があります。年少児から年長児まで、発達段階に応じて楽しめる1冊です。



幼児期の思考力をとらえる

解説

遊びの中に表れる 思考の芽生えを見逃さず もっと考えたくなる 問いと環境を構成する

子どもたちは遊びや生活を通して、さまざまな資質・能力を発揮しています。特集②ではその中の「思考力」に着目し、ベネッセ教育総合研究所が幼児期に発揮される思考の働きを19の「思考スキル」として整理した、「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」(詳細はP.18~19参照)を手がかりにして考えていきます。保育者が幼児期の思考力の芽生えを見取り、より伸ばしていくにはどうしたらよいか、國學院大學の吉永安里先生にお話をうかがいました。



國學院大學
人間開発学部 子ども支援学科 教授
吉永安里先生(よしなが・あさと)

研究分野は、幼児期のことばの発達、小学校国語科教育。東京都私立幼稚園勤務、東京都公立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭を経て、現職。著書に『幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続』(風間書房)、『保育内容「言葉」と指導法:子どもの心のことばに耳を澄まして』(共著、萌文書林)など。

思考する力は体験や感情と結びついて発揮され、深まっていく

幼児期に芽生えている思考 その特徴を知る

夢中で遊んでいるように見える子どもも、遊びの中で次々に問いを生み出し、自分なりに答えを見つけようとしています。そうした問題解決の繰り返しにより、思考力が育っていきます。しかし、背景にある思考のプロセスは、幼児の場合まだ言語発達も十分でないため、外から見えにくく、理解しにくいところもあるでしょう。子どもの姿から思考の芽生えを丁寧に見取り、より高まるように援助できることが、保育者の専門性といえます。

幼児期の子どもは、目の前にある具体的な物や経

験に結びつけて思考を働かせます。例えば、芋掘りをしたあとに収穫した芋を前にして、「一番大きいお芋を持って帰りたい」と考えれば、芋どうしを比べるといった思考が自然と働き始めます。こうした具体物や経験に基づく思考は、個人差はありますが、小学校中学年以降に数字を始めとした抽象的な概念が十分に理解できるようになると、具体物や経験を離れた思考へと変化していきます。

幼児期の思考力は知識・技能などと明確に分けることは難しく、遊びや生活の中で混然一体となって発揮されます。また、思考力などの認知能力は、自分の感情や自己認識、他者とのコミュニケーション能力といった社会情緒的能力とともに育っていくのも特徴で

す。例えば、園の友だちと一緒に楽しく掘った芋の中で一番大きい芋を見つけるといった、具体的で心動く体験と思考が結びつけば、子どもは自然に興味をもって探究し始めます。逆に、ブロックを意味もなく目の前に出されて「大きい順に並べて」と言われても、なかなか思考は動き出しません。さらに、保育者との間に安心できる関係があるかも重要です。保育者の声かけや環境構成により、子どもが安心して遊びに集中できると、その中で伸び伸びと思考が発揮されます。

幼児期の教育では、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱を一体的に育む大切さが、要領・指針^{*1}に示されています。幼児期には思考力だけを切り離して伸ばすのは難しく、子どもが興味をもてる体験を通してさまざまな資質・能力をバランスよく育てていくことが大切なのです。

思考スキルを用いて 子どもの思考の育ちを言葉にする

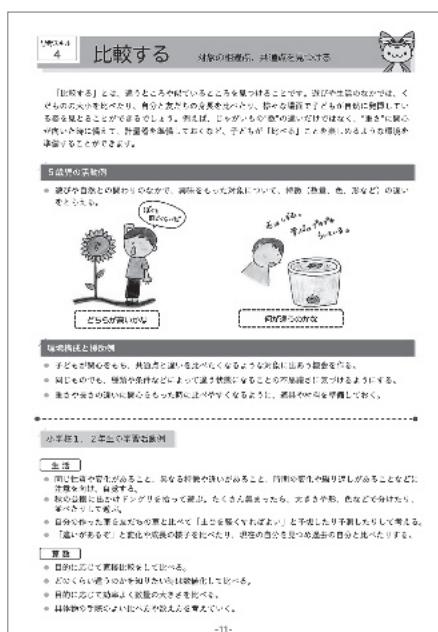
ところが、これまでの保育を振り返ると、資質・能力の見取りや育成にはやや偏りがあったように感じられます。思考力よりも、相手に共感する、友だちと上手につき合うといった子どもの情緒面を重視

する傾向が強かったのではないかでしょうか。もちろん、情緒的な育ちは非常に大切です。ただ、思考力などの認知能力は「すごいね」「頑張ったね」といった漠然とした言葉で語られがちで、その中身は十分にとらえきれていたなかったように思います。小学校以降の教育では、各教科の学習指導要領に育成すべき思考力が具体的に示されていますが、幼児教育では、そうした要素が明確に示されてこなかったことも一因といえるでしょう。

子どもの育ちを読み取る手がかりの1つに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」(以下、「10の姿」)があります。これは、社会情緒的能力と認知能力による子どもの育ちが、環境の中で一体となって発揮される子どもの姿として示されています。さらにもう少し、認知能力である思考力をより明確に捉えるために活用できるのが、「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」です(図)。子どもが遊びや生活の中で発揮する思考の芽生えが、19の思考スキル^{*2}で整理されており、思考力の見取りや育成をする際の具体的なヒントを得ることができます(詳細はP.18～19参照)。

19の思考スキルを一覧すると、幼児期にも実にさまざまな思考パターンが働いていることがわかるでしょう。こうした枠組みを手がかりにすること

図 思考スキルの発揮の見取り方と援助の例～「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より



① 思考スキル

小学校以降の学習活動にもつながる思考力の枠組み

② 活動例

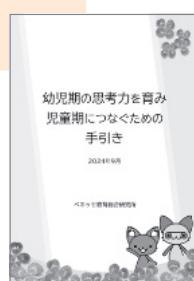
思考スキルを発揮していると思われる5歳児の活動の例

③ 環境構成と援助例

思考スキルの発揮を促す保育者による援助の例

④ 小学校での学習活動例

小学校(主に1、2年生)での学習活動例



※「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より。(詳細はP.18～19参照)。

* 1 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

* 2 考えるための技法。特集②(P.14～21)内では「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」にまとめられている思考スキルを指す。



で、子どもの思考の動きをより的確に捉え、言葉で表現しやすくなると思います。ただ、注意したいのは、思考スキルは子ども一人ひとりの能力を評価するためのものではない、ということです。「10の姿」と同様に、あくまでも子どもの姿を通して保育者のかかわりや環境構成を見直し、よりよい援助へとつなげることで、より豊かな思考が生まれるのです。

多様な思考力を育む視点をもち、日々の保育を振り返る

意欲的になれる問い合わせや環境を用意して子どもの思考を豊かにする

思考スキルを意識することで、子どもへの言葉がけや援助のあり方は変化していきます。ここでは、前述の芋掘り後に「一番大きいお芋を持って帰りたい」と思った、「比較」の思考スキルが働き始めている子どもについて考えてみましょう。

このとき、「みんなで頑張ったから先生が分けるね」と保育者がやってしまうと、結果的に子どもが考える機会を奪ってしまいます。例えば「だれのお芋が一番大きいかな？」と問い合わせたり、子どもの思考の動きによっては芋に巻いて太さを測る紙テープや重さを量るはかりを用意したりすることも考えられます。思考力を育むには、子どもたちが「何と比較して大きいと思うのか」といった、思考を揺さぶる問い合わせが重要になるのです。こうしたかかわりによって、子どもたちの中にも新たな問い合わせが生まれ、それを解決しようとする中で、思考はさらに深まっていきます。

別の例も挙げましょう。園庭にあるキャベツ畑で毎年モンシロチョウの幼虫がたくさん生まれて、クラスで飼育している子どもたち。あるとき園庭にアゲハチョウが飛んできたのを見て、保育者が「アゲハチョウはどこにすんでいるのかな？」とつぶやいたところ、それが子どもの問い合わせとなり、図鑑で調べたり、屋外に探しに出かけたりする姿が見られるようになりました。この場面でも、身近なキャベツ畑において、いつも飼育しているモンシロチョウと、突如、目の前に現れたアゲハチョウという2種類のチョウを比べる「比較」の思考スキルが働いていま

なげる際の共通言語として活用してください。したがって、「19の思考スキルをすべて育てなければならない」と考える必要はありません。大切なのは、どのような援助や環境のもとで子どもがどういった思考を働かせているのかを読み取り、それを伸ばす保育を考えていく視点を得る、ということです。

日々の保育を振り返る

す。さらに、保育者が「幼虫からどうやって成虫になるんだろうね？」と問いかければ、「変化をとらえる」「順序立てる」といった思考スキルも引き出されていきます。このように、今まで通りのかかわりの中で保育者が思考スキルの視点をもった問い合わせを投げかけることによって、子どもたちの世界の見え方は広がり、より豊かなものになっていくのです。

日々の保育が同じような活動の繰り返しだと、子どもの発揮する思考がごく限られたものになっていると気づくこともあるでしょう。そうした場合は、子どもが幅広い思考を発揮できるように、保育内容や環境を見直すことが求められます。その際には、「この思考スキルを育てよう」と決めて活動を構成するのではなく、子どもが「どうして？」と思える問い合わせや、やってみたくなる環境を用意することが大切です。そうすることで子どもの思考が自然に引き出され、やる気や集中力、友だちとのかかわりといった社会情緒的能力の育ちにもつながっていきます。

ただし、幼児期の遊びにおいて、思考スキルはすべての子どもに均等に育めるものではありません。問い合わせの種類によって発揮されやすい思考は異なりますし、個人差もあります。多様な経験を通じて、多様な思考が発揮されるような環境を整えることが大切なのです。



思考スキルを共通言語として家庭や小学校との連携に生かす

遊びの中で、子どもがどのような思考スキルを發揮しているのかが見えてくると、保育の振り返り方も変わってきます。「こんな問い合わせや環境があれば、もっと思考が深まったかもしれない」といった気づきが生まれ、次の保育に生かしやすくなります。園内研修などでも、思考スキルは保育者間の共通言語となり、話し合いを深める助けになります。動画や写真を使って保育の場面を共有し、「この子はどのように考えていたか」「どんなかかわりや環境があればもっと思考が引き出せたか」といった視点で話すことで、子どもへの理解が深まり、保育の質も高まっていきます。

思考スキルの枠組みは、保護者に子どもの育ちを伝える際にも生かせます。例えば、保護者に「楽しんでいました」「よく頑張っていました」と言っても、子どもの成長が十分に伝わらないことがあります。また、保護者の中には、幼児期から目に見える成果を求め、思考力を伸ばす市販のワークが必要だと考える人もいるかもしれません。だからこそ、遊びの中で子どもにどのような思考が見られたのかを

具体的に伝え、それが小学校以降の学びにつながっていく思考力の芽生えであると説明することが大切になっていきます。それが、ひいては家庭でも、子どもの思考力を促し、発揮できるようなかかわりにつながっていくでしょう。子どもの育ちを丁寧に伝えることは、保護者への子育て支援にもなるのです。

また、思考スキルは、小学校との接続を円滑にする上でも役立ちます。要録などに思考スキルの枠組みを使って子どもの育ちを記することで、学習指導要領などで思考力になじみのある小学校の先生にとっては、子どもの実態を知る大切な共通言語になります。ただし、小学校に引き継ぐ際に大切なのは、「この子にはこんな力が身についています」といった個人の能力の評価ではなく、「こんな環境の中でこうした援助により、こんな思考力を発揮していました」といった、環境とのかかわりや保育者の援助の中での子どもの姿を伝えることです。近年では小学校でも「幼保小の架け橋プログラム」^{*3}のもと、1年生では学校探検など、子どもが興味をもちやすい活動を取り入れています。子どもたちが園生活を通じてどのような環境でどういった力を発揮していたのかを小学校の先生と共有することは、こうしたカリキュラムでの効果的な指導につながるはずです。



保育者の みなさんへの メッセージ

子どもたちは、遊びの中で「これはどうなっているのだろう」「どうすればうまくいくのかな」などと考えながら、発見や感動を繰り返しています。その姿は、学校教育でも今後さらに重視されていく探究的な学びそのものです。こうした思考プロセスに目を向けると、幼児期の子どもに育っている豊かな力や可能性の大きさに、私たち大人は改めて気づかされるでしょう。ぜひ、こうした視点を保護者とも共有しながら、子どもの育ちを支えていってほしいと思います。そして、先生ご自身も、思考することを楽しんでください！

* 3 5歳児～小学1年生の「架け橋期」にふさわしい学びや生活の基盤を育むことを目的に、文部科学省が2022年度から推進しているプログラム。

園内研修でご活用ください

参考
資料

19の思考スキル

「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より

子どもは遊びを通して、どのように思考力を発揮しているのでしょうか。小・中学校の学習指導要領でも育成がめざされている19の思考スキルの枠組みを手がかりに、幼児期の具体的な活動例をご紹介します。子どもの育ちをとらえ、保育者のかかわり方を考えるヒントとしてご活用ください。

手引きは [幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き](#)  で検索

■ 19の思考スキルと幼児（5歳児）の活動例

No.	思考スキル	定義	5歳児の活動例
1	多面的にみる	多様な視点や観点にたって対象を見る	「友だちはどんな気持ちかな」と自分以外の視点から物事を考えたり、「わからないからAさんに聞いてこよう」「図鑑で調べよう」とさまざまな角度から情報を集めたりする。
2	変化をとらえる	視点を定めて前後の違いをとらえる	野菜や虫などの動植物の成長の様子を観察して「大きくなった」「色が変わった」と驚いたり、散歩などの屋外活動で季節の移り変わりを感じたりする。
3	順序立てる	視点に基づいて対象を並び替える	「お店屋さんごっここの準備をどんな順番ですといいかな」と、段取りや順番を考える。
4	比較する	対象の相違点、共通点を見つける	遊びや生活の中で、くだものの大小を比べたり、自分と友だちの身長を比べたり、物の数量の違いを比べたりする。
5	分類する	属性に従って複数のものをまとまりに分ける	遊びや生活の中で、石を集めて色や大きさで分けたり、野菜を夏と冬に収穫できるもので分けたりする。
6	変換する	表現の形式（文・図・絵など）を変える	絵本で読んだ内容を絵に描いたり、言葉による表現が難しいときに色や形で表現したり、目印や記号を用いて身近な人にわかりやすく伝えたり、自分で覚えたりする。
7	関係づける	学習事項同士のつながりを示す	遊びや生活の中で、「前にしたときには……」と経験の関係を見つけたり、紙を折って冊子を作りながら必要な枚数の関係を見つけたりする。
8	関連づける	学習事項と実体験・経験のつながりを示す	園での友だちとの「ごっこ遊び」のような場面で、家庭や地域で体験したことと結びつけて、遊びを発展させていく。

No.	思考スキル	定義	5歳児の活動例
9	理由づける	意見や判断の理由を示す	遊びをもっと楽しくするためのアイデアやルールを考え、友だちにわかってもらうためにその理由を言ったり、不思議な自然現象に出会ったときにはその理由を考えたりする。
10	見通す	自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する	積み木遊びの中で「もっと高く積むにはどうしたらいいかな」と考えて、小さい積み木を選んだり、積み方を工夫したりする。
11	抽象化する	事例からきまりや包括的な概念をつくる	色水に紙の下のほうを浸すと上まで染み込む様子や、異なる花の色水を混ぜたときの様子を観察し、水や紙、色の性質に気づく。
12	焦点化する	重点を定め、注目する対象を決める	リレーで勝つためには、「バトンを渡すときにスピードが落ちないようにしよう」などと、ある観点に着目する。
13	評価する	視点や観点をもち根拠に基づいて対象への意見をもつ	自分の意見や感想をもち、友だちの意見を聞いて自分の考えを変えたり、自分の感覚的な考えを図鑑や本で確かめたりする。
14	構造化する	順序や筋道をもとに部分同士を関係づける	劇遊びで「けんかしていたけれど仲直りをして、最後に手をつなぐお話をいい」などのように構成を考える。
15	推論する	根拠にもとづいて先や結果を予想する	公園の湿った場所で虫を見つけたことを覚えていて、別の公園でも同じような虫を探そうとして、湿った場所に行く。
16	具体化する	学習事項に対応した具体例を示す	工作で「地震に強い家を作ろう」と思い、「そのためにはどうしたらいいかな」と考えて柱の太さを工夫する。
17	応用する	既習事項を用いて課題・問題を解決する	自分たちが育てた野菜をカラスから守るために、これまでの経験から、光るディスクを使ってカラスを追い払うことを思いつく。
18	広げてみる	物事についての意味やイメージ等を広げる	お絵描きや工作を通じて「こんなふうに作ったら面白そう」と、さまざまなアイデアをもったり、素材を用いたりしながら、自分の作りたいもののイメージを広げていく。
19	要約する	必要な情報に絞って情報を単純・簡単にする	集まりの会などの場面で、自分や相手にとって特に大切だと思うことに絞って、ひと言で話す。

- 19の思考スキルと定義は、泰山裕（2014）「思考力育成を目指した授業設計のための思考スキルの体系化と評価」に基づいています。
- 19の思考スキルのうち、「11. 抽象化する」「14. 構造化する」「15. 推論する」といったスキルは、小学校高学年での発揮が期待されていますが、この表ではそのような高度な思考スキルも含めて、保育の場面に当てはめて整理しています。
- 19の思考スキルと「5歳児の活動例」は、ベネッセ教育総合研究所（2024）「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より抜粋しています。
- 手引きの内容は、(株)ベネッセスタイルケアとの共同研究による研究の成果の一部をまとめたものです。

園の取り組み事例

ベネッセ 新横浜保育園（神奈川県・私営）

思考を促す声かけて 子どもに変化をもたらし、 未来につながる力を育む

思考スキル*によって子どもの思考の動きを明らかにし、育ちを促す

思考スキルをヒントとして 子どもの育ちを言語化し、共有する

ベネッセ 新横浜保育園で園長を務める梅澤京子先生は、幼小接続期に育みたい思考力の研究に加わったことをきっかけに、子どもの育ちを丁寧に見取りながら、思考スキルを意識した保育を行っています。思考スキルを取り入れた保育を、園全体で一気に展開するのは難しいと感じた梅澤園長は、まず自分が思考スキルを学び、子どもの姿を語り合うミーティングや研修で、育ちを言語化する際のヒントとして活用するようになりました。

「保育者が『○○ちゃんにこんな姿がありました』と言ったときに、『子どもはそこでどんなことを考えているのかな』『今の姿は、次にどう変化していくのだろう』などと、思考スキルを意識した問いかけをしています。そうすることで、子どもの思考が言語化され、保育者の感覚に頼らない共通認識となって、その先の発達を促す援助を考える手立てになると考えています」（梅澤園長）

子どもが砂場で遊んでいるときに「あっちの砂は固まらないけど、こっちの砂は固まる」と話していたら、思考スキルの「比較する」が働いていると考えられます。「水にぬれているからじゃないかな」と気づけば、「理由づける」「関係づける」が働いています。こうした思考をさらに広げるために、湿った砂や土に子どもたちが気づけるような、砂場の砂とは別の環境の検討へとつなげています。



園長
梅澤京子 先生

お話ししてくださいった先生

思考力と社会情緒的能力が 互いに深くかかわる可能性を実感

このような取り組みを重ねる中で、梅澤園長は、思考力と社会情緒的能力の育ちが互いに深くかかわっている可能性にも気づいたといいます。

「以前なら『優しい』『頑張っている』という言葉でとらえていた場面でも、子どもの思考を意識して話を聞くと、ほかの人の状況を理解して『多面的にみる』、自分の経験と『関連づける』といった思考が働いていることがあります。こうした思考を促すことで、社会情緒的能力の育ちにつながることもあると考えています」（梅澤園長）

梅澤園長が特に印象的だったと語るのが、周囲とのかかわりが苦手だった年長児のケースです。卒園式で披露する演目を歌と踊りにしようと子どもたちが話し合って決めたとき、その子は最初、一緒に活動することを拒否していました。クラスの友だちが「無理しなくていいよ」と気づかう様子を見た梅澤園長は、「お友だちは優しい言葉をかけてくれたね。次はあなたが、お友だちのためにできることを考えてみよう」と提案。すると、その子は真剣に考えな

* 考えるための技法。特集②（P.14～21）内では「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」にまとめられている思考スキルを指す。

思考の見取りEpisode 番外編
提案理由を聞いてみたら……

地域の介護付き有料老人ホームの方からお誘いを受けて、子どもたちが高齢者の方と交流をもつことになりました。何をしたいか子どもたちに聞くと、盆踊りがいいと言うので、一緒に踊る1曲を決めることになりました。



Aちゃんから「おばけの花火音頭」のアイデアが出たとき、ほかの子どもたちも好きな踊りだったので、すぐに決定しました。それで終えてもよかったですですが、私は思考スキルを学んでいる最中だったこともあり、どうしてもAちゃんの心の動きを聞きたくなつたのです。Aちゃんの思いやりに裏打ちされた理由を引き出して価値づけできしたこと、保護者にもお伝えできたことは本当によかったです。思考スキルを意識した問い合わせによって、社会情緒的能力の育ちまで鮮明になった、印象深いできごとでした。

がら涙をこぼし、「恥ずかしいから踊れないけど、歌は歌える」と答えたといいます。卒園式当日は、だれよりも大きな声で歌う、その子の姿がありました。

「自分はなぜ嫌なのかという理由をきちんと説明し、周りの状況を多面的に見て、自分のできることを考えてくれました。本人が思考を働かせて、自分でどうするかという選択ができたのは自信になったでしょうし、今後に向けて大切な力になると感じています。また、保護者に対しても、その子が歌えるように導いたアプローチを、思考スキルによってわかりやすくお伝えできたと思います」(梅澤園長)

思考スキルが、子どもの姿をとらえる手がかりの1つになることを実感している梅澤園長は、今後、

園内にそれができる人材を増やし、保護者とも学び合う機会をつくっていきたいと考えています。

「ベテランの保育者は経験が豊富な分、感覚的にとらえていたことを言語化できるという面で、思考スキルを受け入れやすいと思います。若手の保育者も『子どもはこんなに深く考えているのか』という気づきを得て、自身のかかわりを再考していくでしょう。こうして子どもの姿から思考の芽をとらえ、思考スキルを使って深い語り合いができるようになれば、保護者や小学校にも育ちを伝えやすくなります。具体的な形はこれから見いだしていくますが、思考スキルを活用する土壌を、少しずつ園内に根づかせていきたいと思います」(梅澤園長)

ベネッセ 新横浜
保育園

「その子らしく、伸びていく。」ことを大切に、子どもたちが、「自分っていいな」と自己肯定感を高められる保育を重視。一人ひとりと丁寧にかかわりながら、子どもの主体性を引き出して、自分の思いで遊びや活動を展開できる環境構成を大切にしている。

- 園長: 梅澤京子先生
- 所在地: 神奈川県横浜市港北区新横浜2-11
新横浜スケートセンター2階
- 園児数: 定員60人/在園62人

刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報を届けます。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの中の幼児教育」バックナンバー

2025 (春) | 特集 | 学び合いで高める保育者の専門性

2024 (秋) | 特集 | 全国調査から見えてくる 保育の課題と未来へのヒント

2024 (春) | 特集 | 組織で積み上げる 園と保護者のコミュニケーション

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードいただけます。

ベネッセ これからの幼児教育

検索

<https://benesse.jp/berd/magazine/en/backnumber/>

「これからの中の幼児教育」お問い合わせ窓口

〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17 TEL.0120-926-610(通話料無料) 受付時間／9:00~18:00(土日・祝日・年末年始除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかげください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかげください(ただし通話料がかかります)。